
お化け屋敷

火野恭子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

お化け屋敷

【Nコード】

N2825I

【作者名】

火野恭子

【あらすじ】

何故だか分からないけれど怖いと感じるものがある。

怖いのは、視界のそと。

怖いのは、ひと。

怖いのは、じぶん。

エレベーターが怖いんです。私。特に夜は。

あの奇妙な箱に乗って、何処に着くのかと思うんです。

何故か、「こうなったら嫌だなあ」という思いつきが、

沢山出てくるのです。

閉じ込められたら、という単純なものから、

例えば、

扉が開いたエレベーターの中に、

「後ろ向き」で立ってる人が居たら、とか、

ボタンが効かなかったら、とか、

3階を押したのに、どんどん上に上がっていったら、とか、

逆に、

一階で乗って、地下など無いのに下がって行ったら、とか、

誰も居ないのに、誰かの咳きが聞えたら、とか。

数え上げたらキリが無い位に、想像してしまうのです。

昔はお風呂が怖かった。

お風呂の湯船のフタを開ける事が出来なかった。

そこに何が在るかなど、開けなくては分からないではないですか。

清浄なお湯が張られていると疑いもせず、

考えなしに開けてしまえる人が私は羨ましいです。

もしフタが開いていても、入浴剤で濁っけていても怖いんです。

その湯船に今日も、前の日と同じように底があるのかなど、

入って見なくては解らないし、何が潜んでいるのかも解らない。

鏡も怖い。鏡の中の私は、今まで私を裏切った姿をした事が無い。

ちゃんと私が動いたように動いてくれます。

だけど、次もそうである保障があるんですか？

鏡。嗚呼、なんだか私は大事な事を忘れてる気がします。

私は、万事そうなのです。

何故か私は、新しい視界を得る時に、
言いようの無い恐怖を感じるのです。

今見えてない所で、何が起こっているのか、
それを知る術は、無いでしょうか？

だから時に、私は後ろを振り向く事すら出来なくなります。
そこに何も無いと、一体誰が言えるでしょう。

私は今日も、「あれ」に襲われました。

寝ている時に、たまにあれは来るのです。

私はぼんやりと眠りから意識を取り戻します。
すると、玄関が開く音がする。

ああ、もう夜なのか、そんな時間なのか、と私は、
同居人が帰って来たのかと時計を見ます。

午後3時。

「ひっ」と小さく息をのんで、布団をかぶります。

私は絶対に眼を開ける事が出来ません。

足音がします。こつちに向かって来るのです。

足音は、ベットの前で止まり、

私は全身が硬直した様に動きません。

「居る」のです。誰かが、何かが。確実に居るのです。
居る筈が無いのに、

どうしても居るとしか思えない「存在」の気配。

そして私の被っている布団を、手が撫でる。

布団が擦れる音がはっきりと聞えるのです。

瞬間、生暖かい手が私の頬を撫でるのです。

幻覚ではなく、幻触というのでしょうか。

確かに「自分は起きている」という自覚があります。

(夢を見ている時にはありえない自覚です)

気のせい、と言うには確かな触感です。

眼を開けていないから解らないだけで、
実際にストーカーの様な人間がこの部屋に侵入していると言う方が
よっぽどしっくりくる説明になると思うほどの。

兎に角、自分の視野以外では、何が起きていても解らない、
と、そう私は思っています。

例えば私は今、貴方の家のドアの前に居ます。

そして、合鍵を持っているのに、扉を開ける事が出来ません。
私の来訪を喜ぶ貴方が、抱き締めてくれるかもしれませんが、
だけれど、

「そこ」に何があるのか、私は考えてしまおう。

貴方が、髪の毛の長い女に、溜息を耳に押し込まれて居ないとは、
限らない。

貴方が、戯れに殺した人間を、解剖していないとも限らない。
私にとってこの世は、お化け屋敷なのです。

そんな私の杞憂を貴方はいつも笑います。

信じていたものが崩壊する瞬間を目にした事の無い、
崩れない法則があるという事を信じている強い眼です。

貴方、貴方に逢いたい。

そのドアの内側が、どんな世界であっても。

そう自分を鼓舞して、私は鍵を差込み、ドアを開けます。

そして眼にしたのは、知らない女と眠っている貴方でした。

嗚呼、この世は、お化け屋敷なのです・・・

眼に見えない所で、恐ろしいものが蠢くお化け屋敷なのです。
気を失う私に貴方が言います。

「今日は来ないって言ったのに・・・」と。

夢を見ました。

夢の中で、私は子供です。多分、7歳位の。

「テレビを見ていなさい」と、母が言いました。いつも満足に見る事の許されないテレビを見れると、私は心躍ったのです。

しばらくすると、父が帰宅した気配がし、どうやら母と話あっているようです。

途中で、父の怒鳴り声が聞えました。

私は、思わず振り向くのです。

私に気付いて母は怒鳴りました。

「テレビを見ていなさいって、言ったでしょう！」と。

その剣幕に圧され、私はテレビに向き直ります。

父と母の言い合いは、子供でも解るほど、簡単な言葉でした。

そう、「殺してやる」とか、「やってみろ」とか。

私は硬直したまま、

愛らしいキャラクターが画面を飛び回るのを見ています。

そうして、ふと気がつくのです。

テレビの横の、置き鏡に。

置き鏡の中には、父と母が映って居ました。

私は釘付けになります。

無邪気に、言葉を解さない子供の様に、何も解ってないように、無心にテレビを見ているふりをして、見ていました。

そう、本当は見れない筈のものを、ずっと見ていたのです。背後を。

そこには、お化けが居ました。

父も母もお化けでした。

父は血まみれで、母を殴っていました。

母は包丁を持ち出して、父に向かっていました。

父は「俺など死ねばいいのだろう」と叫び、

窓から飛びおりようとしています。

ぐちゃぐちゃです。父も母も。

陽だまりの様な二人が、お化けになっていたのです。

私はいつも、そうしてテレビに向いて、二人を見ていたのです。

目が覚めて、私は彼の部屋に独りでした。

「少ししたら帰る。話を聞いてくれ」のメモを眼にします。

私は、思い出したのです。

何故、視界の外が怖いのかという事を。

私は子供の頃、父と母というお化けを見続けていたのです。

そして貴方も、私の見ていないと安心している時には、

私を傷付けるであろう行為を、

楽しげに繰り返すお化けだったのです……

私は、脅かされるのを、止めます。

お化けだらけの、この世の中。

視界の外など、どうして信用出来ましょう。

エレベーターが開いた瞬間、そこにバラバラ死体が在っても

私はもう驚きません。

怖くありません。

私は、この世に居る数少ない「人間」である事を止めます。

お化けを恐れない為に、今度は、私がお化けになればいいのです。

さあ愛しい貴方。

お化け屋敷に、早く帰って来て下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2825i/>

お化け屋敷

2010年10月20日19時25分発行